



成隣だより

平成30年 1月 9日

第 9 号

昭島市立成隣小学校
校長 加賀田 真理

時の流れの中で

校長 加賀田 真理

あけましておめでとうございます。新たな年を迎え、子供たちのために、さらに教育活動を活性化させてまいります。本年もどうぞ、よろしくお願いいたします。

新年や新年度を迎えると、目には見えない時間の区切りを定めることは、人間の大きな発明だと感じています。

地球の公転や自転、月の満ち欠けなどをもとに古代より人間はさまざまな暦を作成し、現在も使用されていますが、太陽暦の始まりは、古代エジプトでナイル川の氾濫とシリウスの位置関係に周期性があることに気がついたことに由来しているそうです。

時間を計る精度も高まり、今の1秒の定義は「セシウム 133 の原子の基底状態の2つの超微細準位間の遷移により放射される電磁波の周期の9192631770倍に等しい時間」と定められているそうです。先日は、東京スカイツリーで地上と展望台で時間の流れが違うことを確かめる実験をしているというニュースを見ました。光格子時計【ひかりこうしどけい：160億年で1秒しか変わらない(!)時計です。】という超高精度の時計を使用すると、450m高さが違う地上と展望台では時間の流れが3日間で100億分の128秒違うことが計れるそうです。(地球の中心から離れるほど【高いところほど】重力が弱まり、時間の流れが早くなるという一般相対性理論に基づく実験です。) 退屈な時間は長く感じ、楽しい時間は短く感じるという人間の時間をとらえる感覚は、今も昔も変わらないかもしれませんが、おおらかな時代から、より精度の高い時間の計り方へとテクノロジーはどんどん進化しているようです。

時間に関係して、昨年「大人になったら読めなくなる絵本」というニュースを見ました。

これは、日がたつにつれて読めなくなるピーターパンの絵本のことです。「絵と文字が日焼けした後の紙の色と同じ色に印刷されていて、絵本を渡された子供が大人になる頃には、絵本全体が日焼けして内容が見えなくなってしまうという仕掛けがしてある。だから絵本を手渡された子供たちが大人になる頃には、絵本全体の日焼けにより、ページに残されるのは黒いインクで印刷されたロンドンの町並みや月などの現実世界のみ。ピーターパンと子供たちのネバーランドの冒険物語は読めなくなってしまうという仕掛けの絵本。」なのだそうです。

これは、多摩美術大学の岡松由華さんという方が、「新しい読書体験を考える」という大学の課題に対して作成した絵本です。その背景には「『本を買ったことに満足して、結局最後まで読まずに本棚の奥底で眠ってしまう』ことがよくあった。」「これは、本の『時間に左右されずにいつでも読めてしまう』特徴の表れで、これが本当の意味での本の寿命を縮めているのではないか。」「『いつか読むことができなくなる本』があれば、より読むことのできる時間を大切にできるのではないか。」という考えがあるとのこと。

時間が有限であることを意識することで、「大切な思いがより強く心に残る」(永遠を得る)という考えは、とても示唆に富む話だと思います。このような考え方にも学びつつ、今年も教育活動を一歩ずつ進めてまいります。今年も教育活動への皆様のご支援とご協力をお願いいたします。